

三加和町文化財調査報告 第5集

田中城跡

V

— 捨て曲輪跡調査の概要 —

1991

三加和町教育委員会

三加和町文化財調査報告 第5集

田中城跡

V

— 捨て曲輪跡調査の概要 —

1991

三加和町教育委員会

序

三加和町教育委員会では、熊本県が提唱する『日本づくり運動』の一環として、昭和61年度から田中城の発掘調査を進めてきましたが、本年度で第Ⅰ期5年間の調査を終了し、来年度から引きつづき第Ⅱ期の調査に入ることにしています。

ここに報告するのは、従来、物見やぐら跡といわれていた箇所調査を実施し、報告書にまとめたものです。

調査の結果、物見やぐら跡や建物跡と思われる遺構はなく、棚列と堀跡がセットとして検出され、本来は捨て曲輪として使用されていたのではないかと推測されるに至りました。

調査により、わずかずつですが中世城としての田中城が姿を見せつつあります。また、平成元年12月には山口県立文書館で『辺春・和仁仕寄陣取図』が発見され、益々注目を集めるようになりました。今後は、これらの資料を町づくりに有効に活用していきたいと考えています。

なお、発掘調査にあたりまして、多大のご指導・ご助言を賜りました熊本県文化課・専門調査員の先生方ならびにご協力いただきました地元の方々に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成3年3月31日

三加和町教育長 蒲池 龍一郎

例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成2年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物及び遺構の実測・製図は黒田が、拓本は塩田喜美子が行った。
4. 写真撮影は黒田が行った。
5. 調査の方法・遺物に関しては、専門調査員のご教示を得た。
6. 本書で使用した略記号は次のとおりである。

SB-掘立柱建物跡 SD-溝遺構
SK-土塼 SX-不明遺構
A-A'・B-B'・C-C' は、断面実測の基準である。
7. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
8. 題字は山下保幸氏による。
9. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 序説	2
第1節 調査に至る経過	2
第2節 調査組織	2
第3節 調査経過	3
第Ⅱ章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	7
(1) 柵列	7
(2) 堀跡	8
①A-A' 断面について	10
②B-B' 断面について	10
③C-C' 断面について	10
(3) 不明遺構	10
(4) 出土遺物	10
第Ⅲ章 まとめ	13
付論 トイレ建設および登城道整備にともなう試掘調査概要	
(1) 試掘Ⅰ	15
(2) 小結	16
(3) 試掘Ⅱ	17
(4) 出土遺物	18

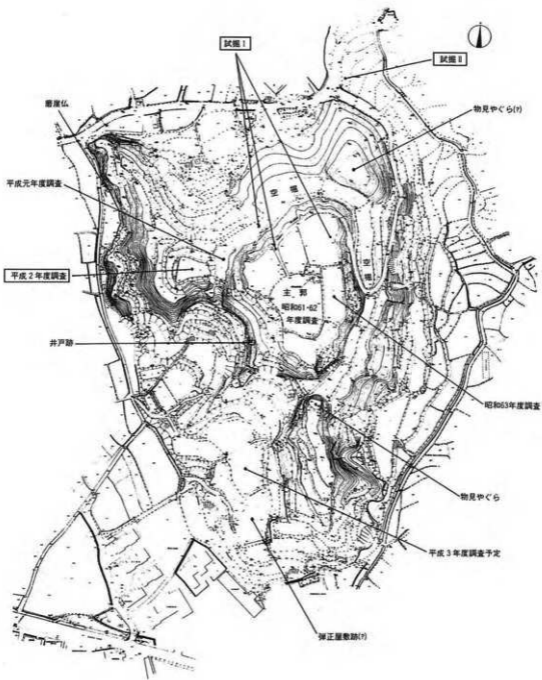
挿図目次

第1図 全体図	1
第2図 遺構配置図	5
第3図 堀跡・柵列実測図	8
第4図 堀跡土層断面図	9
第5図 不明遺構(SX-01)実測図	11
第6図 出土遺物実測図	12

第7図	試掘Ⅰ調査区全体図	14
第8図	試掘Ⅰ-Ⅰ区遺構配置図	15
第9図	試掘Ⅱ出土遺物実測図	16

写真図版目次

図版1	(1)調査前(東より)	(2)遺構検出状況(東より)
	(3)遺構検出状況(北より)	
図版2	(1)柵列検出状況(南より)	(2)柵列発掘状況(南より)
	(3)柵列・堀跡検出状況(北より)	(4)柵列・堀跡発掘状況(北より)
	(5)堀跡土層断面(B-B')	(6)堀跡土層断面(A-A')
	(7)不明遺構(SX-01)検出状況	(8)遺物出土状況
図版3	(1)試掘Ⅰ-Ⅰ区遺構検出状況(南より)	
	(2)試掘Ⅰ-Ⅰ区遺構検出状況(西より)	
	(3)試掘Ⅰ-Ⅱ区遺構検出状況(東より)	
	(4)試掘Ⅱ発掘状況(南より)	
	(5)主郭部整備状況(和仁三兄弟イメージ像)	
	(6)主郭部整備状況(建物標示)	
	(7)主郭部整備状況(門・柵跡)	



第1図 全体図

第I章 序 説

第1節 調査に至る経過

田中城の北及び東側の背後には、福岡県境からのびるやまなみが控えている。そして、田中城を見下ろす2ヶ所に、まだ確認までには至らないが以前から監視台跡、あるいは台場跡と呼ばれているところがある。しかし、これらよりもかなり低いところにある田中城内にも物見やぐらと呼ばれている高台が3ヶ所残っている。昨年度調査を行い、幅9.42m 深さ4.63mにも及ぶ大規模な土木工事によって作られた空堀を巡らすことにより、対岸に残された高台がそれである。北・西・南の3ヶ所に残っているが、このうち北・西の2ヶ所に関しては、単なる物見やぐらにしては面積が広すぎるように思われ、あるいは二・三郭の可能性も考えられていた。

そこで、この場所の性格を明らかにすることと、昨年度調査した空堀及び主郭部との関連を調べるために、西にある物見やぐら1と呼ばれているところを調査することとした。

第2節 調査組織

- 調査主体 三加和町教育委員会
- 調査責任者 蒲池龍一郎（三加和町教育長）
- 調査事務 牛島 茂生（社会教育課課長）
藤木 住人（社会教育課課長補佐）
高木洋一郎（社会教育課主事）
- 調査員 黒田 裕司（社会教育課主事）
- 専門調査員 石井 進（東京大学文学部教授）
岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館教授）
大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授）
原口 長之（熊本県文化財審議員）
田辺 哲夫（日本考古学協会員）
工藤 敬一（熊本大学文学部教授）
北野 隆（熊本大学工学部教授）
阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）
大田 幸博（熊本県文化課文化財保護主事）
- 発掘作業員 中尾 健照・福原 房子・益 加代子・益 オワリ・益 サカエ
辺原 綱代・益 浅代

発掘協力者 江崎 正（熊本県文化課課長）・隈 昭志（熊本県文化課審議員）
桑原 憲彰（熊本県文化課文化財調査第2係長）・大倉 隆二（熊本県文化課参事）
・中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）・坂本 重義（南関町教員委員会）
・田中城保存整備協議会

第3節 調査経過

- 6月1日～ 発掘調査準備開始。
- 8月1日 調査予定地が荒れていたため、草刈りや伐採後の杉の後片付けから始める。
- 8月7日 表土剥ぎ。
- 8月17日 長崎県松浦市教育委員会視察（5名）。
- 8月31日 プレハブがようやく建つ。
- 9月4日 愛媛県北宇和郡松野町教育委員会視察（3名）。
- 9月14日 岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授・大田幸博熊本県文化課文化財保護主事視察。
遺構がはっきりしないため、もう少し掘り下げてみてはということと、西側にある土色の異なる部分は堀跡かもしれないとのアドバイスをうける。
- 10月4日 遺構検出をほぼ終了する。
南北方向に歩幅間隔で並ぶ柱穴が検出され、おそらく柵列と思われる。
- 10月11日 長崎県北松浦郡吉井町視察（11名）。
- 10月16日 遺構検出状況写真撮影。
遺構の発掘にかかる。
- 10月22日 土壌の発掘にかかる。
- 10月30日 岡田教授から指摘をうけた、西側の土色の異なる部分の発掘にかかる。
- 11月2日 約1mでようやく底部を確認。堀跡であることがわかる。
- 11月7日 南関第一小学校遠足（約100名）。
- 11月8日 菊池市文化財保護委員視察（11名）。
- 11月14日 測量用杭打ち及び平板測量（1/100）。
- 11月15日 土壌断面実測（1/20）。
- 11月16日 専門調査員会
原口長之・田辺哲夫・北野 隆・大田幸博各氏視察。発掘現場で柵列や堀跡などを見学後、今後の調査・整備方法などについて話し合う。
- 11月20日 矢部町文化財保護委員視察（6名）。
凝灰岩が土壌化したものを埋土とする土壌を掘るが、内部は袋状になって

おり、崩壊の恐れがあるため約2.5m掘り下げた時点で底部を確認しないまま中断する。

- 12月4日 寺本重美鹿央町文化財保護委員長視察。
- 12月6日 遺構発掘状況写真撮影。
- 12月7日～ 遺構実測（1/20）。
- 12月19日～ 埋め戻しにかかる。
- 12月25日 古財誠也植木町文化財保護委員視察。

平成3年

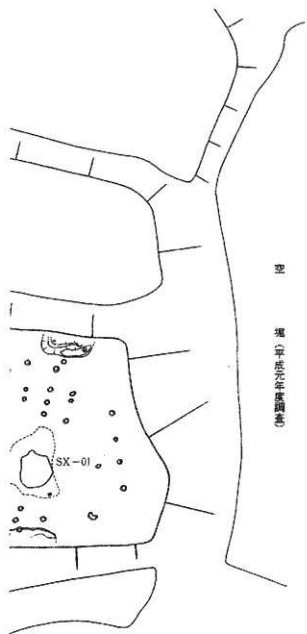
- 2月1日～ 三段目の表土剥ぎ。
- 2月5日～ 遺構検出
柱穴などの遺構は全く確認できず、二本のトレンチをいれてみる。
その結果、旧地形を削って整地を行い、現在のような地形になったと思われる。
- 2月7日～ 埋め戻し。
- 2月13日～ 西側だけに残る二段目の表土剥ぎ。
- 2月21日～ 遺構検出。
若干の柱穴を検出。
- 2月26日～ 埋め戻し。
- 3月7日 天草郡河浦町教育委員会・文化財保護委員視察（7名）。
- 3月10日 山口県立文書館で発見された『辺春・和仁仕寄陣取図』について、昨年3月30日に春富小学校の体育館で開催されたシンポジウムの完全収録集が完成したのを機会に、下記要領により講演会を開催。（約300名）。

『検証・田中城跡』

- 辺春・和仁仕寄陣取図シンポジウム完全収録集発刊記念講演—
 - ・中世武士団の合戦と歴史について
石井 進 東京大学文学部教授
 - ・中世城跡の保存・整備について
岡田 茂弘 国立歴史民俗博物館教授



第2図 道構配置図



SX-不明遺構

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

主郭部を取り巻くように西側を除く三方に巡らされた空堀を作ることにより、対岸の三ヶ所（北・西・南）に物見やぐらと呼ばれている高台が残されている。（現地表面との比高差5.70～6.70m）

今年度調査を行ったのはこのうちの西側に残っているもので、現況は杉山である。昨年買取し、伐採まで終わっていたので、調査の方は下草刈りと伐採後の後片付けから始めることになった。その後、木の根を掘り起こし、ようやく本格的な調査に取りかかることになる。現況は杉山だが、それ以前は畑として耕作されていたため、約30cm程掘り下げると地山が確認され、さらに清掃していくと徐々に遺構が現われた。

9月14日岡田茂弘国立歴史民俗博物館教授が来跡された頃は、まだ遺構がはっきりしない状態であったため、もう少し掘り下げてみてはとのアドバイスをうけて掘り下げると、次第に遺構がはっきりとして、ほぼ中央部を南北方向に一列に走る19個の柱穴が検出され、柵列と推定された。この柵列の西側には並行するように土色の異なる部分があり、岡田先生からはもしかすると堀跡かもしれないとの指摘を受ける。その後、掘り下げていくと、指摘どおり堀跡が確認され、柵列とセットをなす防御施設を構成していることが推定された。この他にも柱穴は検出されたが、南北方向のみにつながるものは多くみられるが、建物跡を構成するような並びは確認できなかった。

また、東側には凝灰岩が土壌化したものを埋土とする土壌がある。上縁は約1.6～2.0mだが、約2.5m掘り下げたところでは約1.7～3.8mと広がり、壁はかなりオーバーハングして崩壊の恐れがあるため、底部は確認できず途中で作業を中止する。

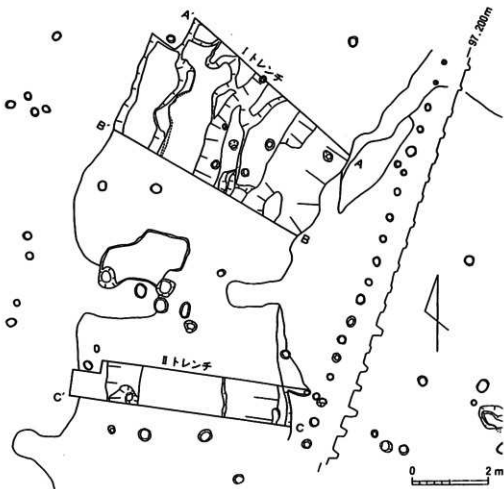
この後、西側だけに残る二段目と東側を除く三方に巡る三段目の遺構確認を行ったが、二段目から若干の柱穴が検出されただけであった。

遺物としては、瓦質の火舎・土師質土器・陶磁器などの小片が若干出土したにとどまった。

第2節 遺構と遺物

(1) 柵列（第3図）

19個の柱穴からなり調査区のほぼ中央部をN20°E方向に走る。柱穴の大きさは径10～30cmと小さく、深さも10～27cmと非常に浅い。柱間隔はおおよそひと歩幅（約60cm）と狭く、整然と並んでいたことが想像される。土塁の有無については確認できなかったが、耕



第3図 堀跡・棚列実測図

作土が約30cmあることから、柱は約40cm以上は埋められていたことになり土塁がなくても充分柵としての機能を果たしていたと思われる。

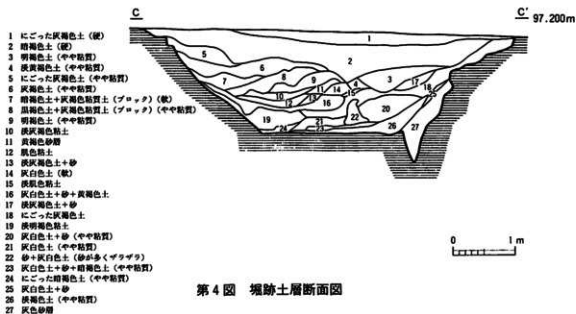
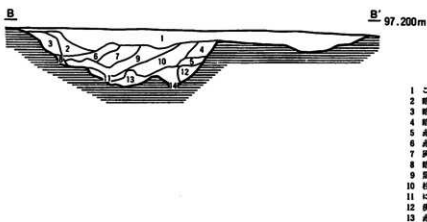
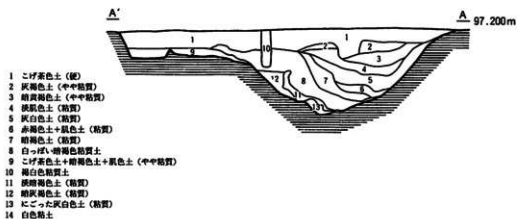
(2) 堀跡 (第3図)

棚列と並行し、棚列の外側に弧を描くように巡っている。柱穴との重複があるため、全体を掘ることはできず、2本のトレンチをいれる。平面的な土色の変化は幅約6mにわたっており、中央部は陸橋部のように東西からくびれている。

I トレンチでは幅約2~2.5mの平坦部があり、幅3m、深さ0.9~1.4mの堀となっている。南側が浅く北へと傾斜しており、断面は半円形を呈する。

II トレンチは上縁約6m、下縁約2.3m、深さ約1.6mとI トレンチに比べると大きくなり、断面も逆台形となる。

これらから、馬の背状に中央部が高くなって両側に傾斜し、北側は半円状で幅も狭く、



第4図 塚跡土層断面図

浅くなっており、南側は幅広く、しかも深くなっていることが確認された。

①A-A' 断面について (第4図)

幅5.45m、深さ1.38mを測る。西側は約40cmの深さに約1.8mの平坦面を設けてから掘りこんでいる。斜面は緩やかな傾斜をもち、底部には平坦面はみられない。8まで、一旦埋まり、幅約2m、深さ約1.2mと小規模になっていったことが推測される。さらに、その後も埋まり続け、最終的には整地され消滅していった模様である。この面は全体的に炭化物・焼土を含み、特に11には多量の炭化物が混入している。

②B-B' 断面について (第4図)

幅5.64m、深さ0.94mを測る。A-A'同様、西側に約2m平坦面を設けている。この断面も、緩やかな傾斜をしており底部は二つに分かれているが、いずれも丸味を帯びている。西側の方は小さく、こちらが埋まってから幅約2.9mもしくは約2.6m、深さ0.94mもしくは約0.8mと縮小して存在していたと思われる。

③C-C' 断面について (第4図)

断面は逆台形をなし、上縁約6m、下縁約2.2m、深さ1.64mを測る。斜面は削りと急傾斜で底部も平たく整形しており、1トレンチと比べると非常に丁寧な作りということができる。西側の斜面には近くに埋土が砂の柱穴が作られているが、堀との関係は不明である。1トレンチと同様、幅約2m程で一度小規模になっているようにも思われるが、1トレンチほど明確ではない。

(3) 不明遺構 (第5図)

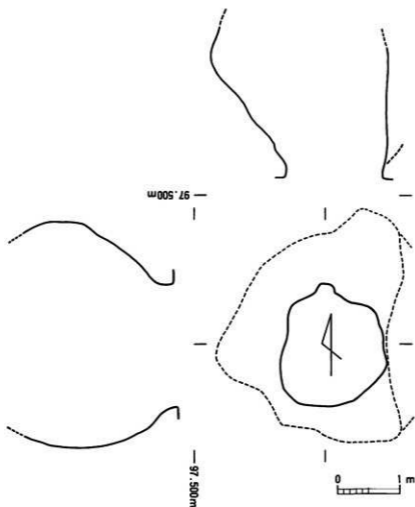
調査区の東側に凝灰岩が土壌化したものが不定形(長径約2m、短径約1.6m)に広がる。長軸を南北方向にとり、埋土は非常に軟らかくサクサクしている。当初は単なる土壌との推定のもとで掘り始めたが、なかなか底部に至らず、壁面がオーバーハングしていくため、東側は出入りのために残して掘り進む。深さ約1.6mで最大径約3.6mとなり、その後すぼまっていく。深さ約2.5mで径約3.0mとなったところで崩壊の恐れがあるため、掘り方を中止する。

この遺構の性格については、橋脚の柱穴とか抜け道とか、いろいろいわれたが結局確定するまでには至らなかった。

(4) 出土遺物 (第6図)

1は瓦質の火舎の口縁部である。断面三角形の突帯を一条貼りつけ、口縁部との間にX文を刻印している。外面は灰白色、内面は灰褐色を呈し、黒雲母・長石などを含み、焼成は良好。

2は1と同一個体と思われる火舎の脚部である。内面は赤褐色、外面は濃灰色を呈し、胎土は1と同様に焼成も良好。脚部の底はよく使い込まれたせいか、すり減って地肌が現

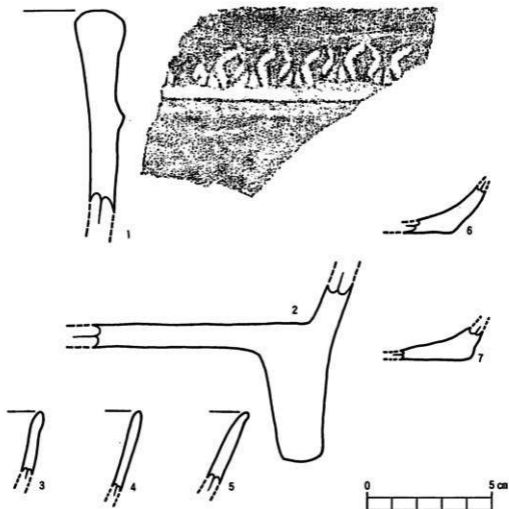


第5図 不明遺構 (SX-01) 実測図

われている。

3～5は青磁碗の口縁部である。3は全体に非常にうすく軸がかかっており、淡青白色を呈する。口縁部はやや外湾し、外器面には削り出しによる鮮明な蓮弁文様がみられ、花卉の先端はやや鋭角で花卉の中央を縦に、明確な稜線が下がっている。4は淡緑青色で、軸は口縁部近くは厚く、胴部にいくにしたがってうすくなっている。口縁部は胴部に比べてやや肥厚しており、外器面には削り出しによるうすい花卉文様がある。花卉の先端はぼやけてはっきりしない。5は緑青色で、軸は4とは逆で口縁部近くはうすく、胴部はやや厚くなっていく。器壁は口唇部でやや外湾してうすくなっており、外器面には不鮮明な花卉文様が削り出されている。花卉の稜線と思われる縦線だけがやや明確に残っている。また、両面にうすく貫入がはいっている。3と5は16世紀、4は14世紀のものと思われる。

6・7は土師質の皿である。6の外面は淡肌色、内面は淡赤褐色で、胎土・焼成ともやや良好。底部と体部の境ははっきりしており、やや内湾気味に立ち上がる。底部はすり減ってはっきりしないが、おそらく糸切り底と思われる。7は内外面とも淡肌色で、底は淡灰色を呈する。底部と体部の境ははっきりしており、やや内湾気味に立ち上がる。胎土・焼成ともやや良好で、底部は糸切り底である。



第6図 出土遺物実測図

第Ⅲ章 ま と め

主郭側から空堀越しに今回の調査区を臨むと、三段に整形された地形をはっきりと目にする事ができる。

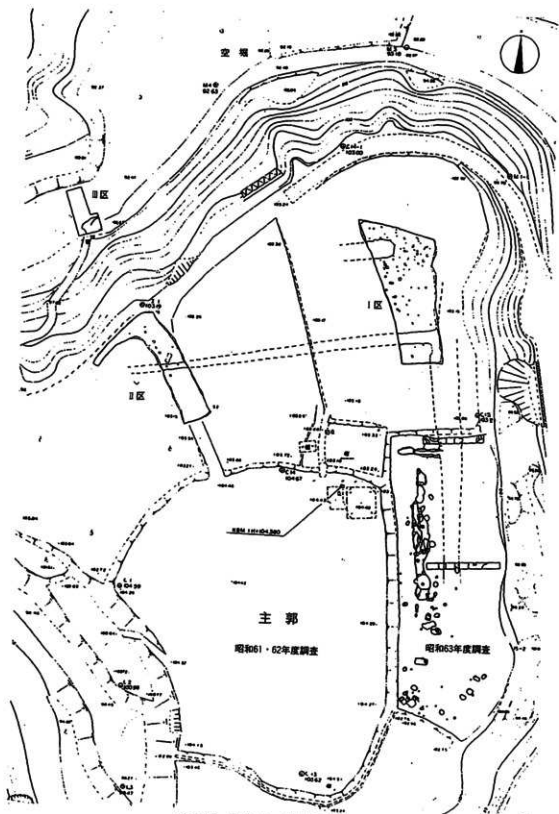
今回検出した遺構は柱穴・堀跡・不明遺構などで、調査区のほぼ全体に広がっている。これらのうち、はっきりと性格まで確認できるものは調査区のほぼ中央をN20°E方向に走る柵列と、これに並行するように作られた堀跡である。

柵列は19個の柱穴からなり、約60cm間隔で整然と並んでいる。昭和61・62年度で調査を行った主郭部では、2～3m間隔で並ぶ柱穴を柵列とみなし、平成元年度にその間を埋めるように約50cm間隔で柱を立て、整備を実施したが、今回検出したものはまさに主郭部で復元した柵列を思わせるもので、戦国時代をほうふつとさせるような感じがする。この柵列とセットをなす防御施設として作られたと思われるのが、柵列の西(外)側で検出された堀跡である。平面で幅約6mを測り、中央部がやや膨らんだ弧状を呈している。2本のトレンチをいれて堀の状態を確認してみると、南側では上幅約6m、下幅約2.3m、深さ約1.6mときれいな逆台形に作られているが、北側では西側に約2mの平坦部を設け、堀幅は約3.5mと狭くなり、深さも約0.9～1.4mと浅くなっている。平面で見ても、陸橋部状に凹んでいる部分を境に中央部が馬の背状になって南北両方向に傾斜している。柱穴との重複を観察してみると、この堀を埋めた後作られているものもあり、少なくとも二時期が考えられる。

調査区の東側では、不定形の土壌が検出された。壁面がオーバーハングしていて崩壊の恐れがあるため、全容は確認できなかったが上縁約2×1.6m、深さ約2.5m、下幅約3mの土壌である。埋土は凝灰岩が土壌化したものでサクサクして非常に軟らかい。昨年度の空堀の調査では、今年度の調査区の下部のみでしか凝灰岩層があることは確認できていないので、この土壌が人為的に作られたことは明らかであるが、使用目的まで推定するには至らなかった。

この後、西側だけに残る二段目と、東側を除く三方にある三段目の表土を剥ぎ遺構を確認する。二段目からは若干の柱穴が検出できたがまとまりはなく、三段目からは検出できなかった。三段目に2本のトレンチをいれてみると、半分位のところから旧地形が落ち込んでいるのが確認され、削ることにより平坦部を広め、余った土で下段の整地をしていくという方法でこの高台が階段状に作られたものと思われる。

従来、この高台は物見やぐら跡と呼ばれていたが、今回の調査で物見やぐらを想定させる遺構、また建物跡などは一切検出されず、柵列・堀跡が検出されただけのため、捨て曲輪として使用されていたと考えてよさそうである。



第7图 试掘I 調査区全体图

付 論

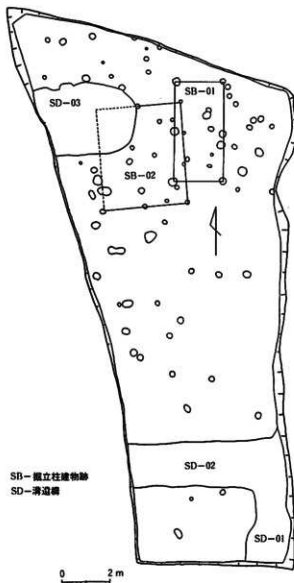
トイレ建設および登城道整備にともなう試掘調査概要

(1) 試掘 I

企画観光課の平成2年度の整備計画として主郭部の下段に広がる曲輪のうち、現在、駐車場として利用している北側の一筆の東側にトイレを建設し、これと並行して登城道（散策道）の整備が行われることになっていた。この曲輪は昭和63年度に一部の調査を行い、鍛冶跡を思わせる遺構と多量の遺物が出土し、今回の整備予定地にも何らかの遺構が埋も

れているのではないかとの推測のもと、工事に先立って平成2年6月22日～8月2日まで試掘調査を実施した。調査はトイレ建設予定地をⅠ区登城道整備のうち主郭部から続く部分をⅡ区、空堀部分をⅢ区として行った。

Ⅰ区は8×20mとやや広めの調査区を南北方向に縦長に設けた。約30cm表土を剝ぐと黄褐色土層があらわれ、丁寧に精査していくと、点々と柱穴や溝と思われるものが確認され柱穴のつながりを検討していくと2棟の掘立柱建物跡が検出できた。SB-01は桁行2間＝約4m、梁行1間＝約2mの建物で桁行を南北方向にとっている。柱穴の大きさはほぼ40cmと同じで、柱間隔も桁・梁行とも約2mとほぼ一致している。SB-02は桁行3間＝約4.25m、梁行2間＝約3.55m、桁行をN6°Wにとる。SB-01に比べると、柱穴の大きさは極めて小さく約20cmである。柱間隔は桁行約1.2m、梁行約1.75m。この2棟は切り合っているが、その前後関係は不明である。



第8図 試掘Ⅰ-Ⅰ区遺構配置図

溝遺構は3本が確認された。SD-01は南北方向に走るもので、調査区の東南隅でわずかに確認されたにすぎない。溝の方向からいって、昭和63年度の調査で確認された溝の延長と考えられる。これと直交して東西方向に走るのが、幅約2mのSD-02である。さらに、SD-02の北側約12mのところを並行するように走るのが、幅約3mのSD-03である。しかし、いずれも部分的に確認しただけなので詳細は不明である。

Ⅰ区は、整備の終わった主郭部から延びる道を登城道（散策道）として整備するという事で、L字状に調査区を設ける。Ⅰ区と同様表土を約30cm取りのぞくと、点々と柱穴があらわれるが、調査区が細長い為、つながりはよくわからない。また、中央部から幅約1mの東西方向に走る溝が検出された。幅は狭くなっているが、溝の方向を検討してみると、Ⅰ区のSD-02の延長と考えてもよさそうである。また、約2.5×0.6mの隅丸長方形プランの土壇も1基検出された。

Ⅱ区は、昨年度調査を行った空堀のつづき具合を確認するため設置した。主郭側では地表下約1.5mのところまで凝灰岩層を確認した。中央部にボーリング棒を刺しても底部に達せず、また土層が水平にはいつていることから空堀がこの部分まで続いていることは間違いないと思われる。ただし、対岸の立ち上がりは確認できなかった。昭和28年に熊本県地方を襲った大雨により、この部分がかなり崩壊したそうなので、あるいは消失したのかもわからない。

(2) 小 結

遺構確認のための試掘調査であり、調査範囲が極めて限られていて全容を掴むことはできなかった。ただ、Ⅰ区からは多くの柱穴が検出され、また、昭和63年度の調査で検出された溝の延長と思われるものも確認された。さらに、これと直交するように走る溝もありⅡ区までも続いているように思われる。これらの溝は主郭部を取り囲むように作られており、主郭部を防御するための施設と考えられる。北側にはSD-02と並行するようにSD-03もあり、二重の防御となっていたのだろうか。掘立柱建物跡も狭い調査区から2棟が検出されたことから、この主郭部の下段を全面調査すれば、多数の掘立柱建物跡が検出されることは当然予測され、当時の中世城の様子はかなりわかるのではないだろうか。

Ⅱ区は登城道が想定されるということで、調査を行ったが道路跡を思わせる遺構は検出できず、もしも存在していたとしても後世の削平をうけて消滅したものと思われる。

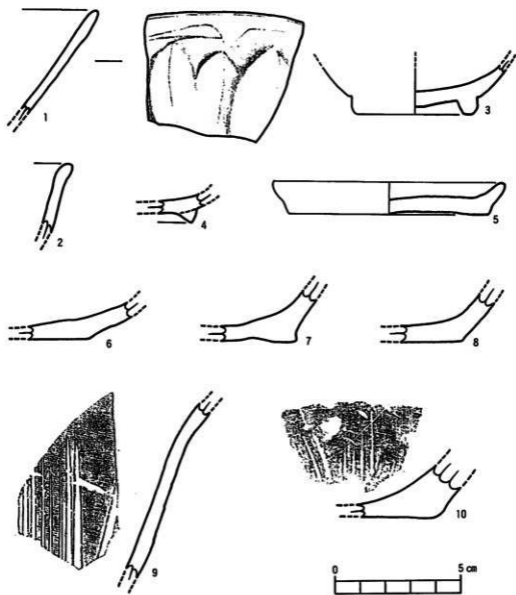
出土遺物は、表土を剥いだだけで遺構の発掘は行わなかったため、ほとんどみられなかった。

このため、登城道は土盛り工法なので関係ないが、トイレの建設は浄化槽を埋めるために遺構を破壊すると考え、この場所への設置は不適と判断した。

(3) 試掘Ⅱ

試掘Ⅰの結果をもとに、新たな候補地が企画観光課により検討された。城内の平坦部はほとんどの箇所で見積が出る可能性があると判断し、現在主郭部上るために利用されている道の入り口部分に変更され、再度試掘をすることになった。

調査は、設計図に基づき浄化槽を埋設するトイレ本体部分(約4×7m)に限って実施した。調査区は、現状が水田であったため床土まで取りのぞいたあと遺構の確認にはいった。その結果遺物は、今年度実施した本調査以上に出土したが、地形が西から東方向に自



第9図 試掘Ⅱ 出土遺物実測図

然に傾斜しているのみで、遺構は全くみられず、流れ込みによるものと思われる。このことから、トイレの建設には差し支えないと判断した。

(4) 出土遺物

試掘Ⅰでは図化するような遺物は出土しなかったもので、ここでは試掘Ⅱで出土したものを報告する。

1～3は青磁碗である。1は全面に淡青白色の釉が均一にかかっている。器壁は口唇部でやや厚くなっており、外器面には削り出しによる鮮明な蓮弁文様がみられる。花卉の先端はやや鋭角で、花卉の中央を明確な稜線が下がっている。2は緑青色の釉が全体にうすくかかっている。器壁は口唇部でやや外湾しており、波状を呈している。3は碗の高台部である。内・外面とも淡青白色の釉がうすくかかっているが、見込み部分には重ね焼きの跡が残っており、外面も高台部とややあがった部分には釉がかかっていない。高台の内径3.8cm、高さ0.7cmを測る。

4は白磁の高台部で、断面は三角形を呈している。高さは0.5cm。

5～8は土師質の皿である。5は推定口径9.2cm、器高1.3cmを測る。内・外面とも淡褐白色で金雲母などの小粒を含む。底部と体部の境ははっきりしており、やや内湾気味に立ち上がる。底は糸切り底。6は外面が淡肌色、内面は淡褐白色を呈する。体面は底からかなり開き気味に立ち上がる。糸切り底。7は内・外面とも淡褐白色で、底部と体部の境ははっきりしている。糸切り底。8は内面が淡肌色、外面は淡褐白色で、黒雲母・長石などを含む。底部と体部の境ははっきりしており、底部からやや内湾気味に立ち上がる。糸切り底。

9・10はすり鉢である。9は瓦質で内・外面とも赤褐色で、器壁はうすく、胎土はきめ細かくよくしまっている。内面の条線ははっきりしているが、破片が小さいため単位まではわからない。10も瓦質で、内・外面とも灰色を呈している。底部から体部への立ち上がり部分で、内面には5本単位の条線がくっきりと残っている。



(1) 調査前 (東より)



(2) 遺構検出状況 (東より)



(3) 遺構検出状況 (北より)



(1) 棚列検出状況 (南より)



(2) 棚列発掘状況 (南より)



(3) 棚列・堀跡検出状況 (北より)



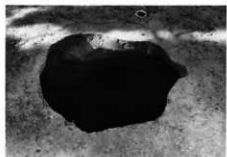
(4) 棚列・堀跡発掘状況 (北より)



(5) 堀跡土層断面 (B-B')



(6) 堀跡土層断面 (A-A')



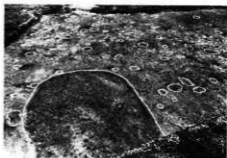
(7) 不明遺構 (SX-01) 検出状況



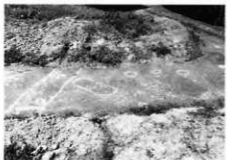
(8) 遺物出土状況



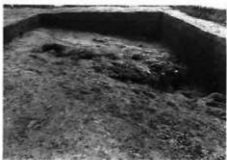
(1) 試掘Ⅰ-Ⅰ区遺構検出状況(南より)



(2) 試掘Ⅰ-Ⅰ区遺構検出状況(西より)



(3) 試掘Ⅰ-Ⅱ区遺構検出状況(東より)



(4) 試掘Ⅱ発掘状況(南より)



(5) 主郭部整備状況(和仁三兄弟イメージ像)



(6) 主郭部整備状況(建物標示)



(7) 主郭部整備状況(門・柵跡)

三加和町文化財調査報告 第5集

田中城跡 V

—捨て曲輪跡調査の概要—

1991年3月31日

発行 三加和町教育委員会
〒861-09

熊本県玉名郡三加和町板橋76

印刷 熊本県印刷センター
〒862

熊本市鹿州瀬町496-1

正 誤 表

P 5 ~ 6 第 2 図中の柵

P 8 第 3 図堀跡・柵列実測図

図版 2 (1)~(4)の柵列

図版 3 (7)の柵跡

⇒ 柵

この電子書籍は、三加和町教育委員会が発行した『三加和町文化財調査報告 第5集 田中城跡 第5巻』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

菊水町と三加和町は、西暦2006年に合併して和水町となりました。調査記録及び出土遺物は、和水町教育委員会が保管しています。

書名：三加和町文化財調査報告 第5集 田中城跡 第5巻

発行：和水町教育委員会

〒861-0913 熊本県玉名郡和水町板楠76番地

TEL 0968-34-3047

電子書籍製作日：2024年2月28日